

安井滄洲について

黒江一郎

安井息軒の父、滄洲は、壮年の頃、江戸の名家古屋普陽・京都の碩学皆川淇園に学び、のち天保二年（一八三二）三月、藩校振徳堂なるやその総裁に任ぜられ、同六年閏七月、六十九才を以て歿した。その生涯は息軒の太平山表（息軒遺稿卷之四）に詳しい。

筆者は先年その未刊の著「温泉記」について記し（昭和三十年八月宮大「教育の研究」第二十三号）さらに、拙編著「安井氏紀行集」（昭和三十四年八月）の中に、同じく未刊の紀行「尚白集」を収めて頭注を付した。

それらを通読すれば、その性格・学問の概要を知り得るのであるが、ここにさらに、筆者が直接探索蒐集した中から未発表の未刊の資料を補足して、その人となりを究明することは、とりもなおさず息軒の性格・学問の研究上にも必要なことであると思われる。息軒はこの父の風貌から学問まで、そのままそっくり受けついで、これを大成したものであるからである。

滄洲は早くから当時その地方に流行した俳諧を学び、前記の「温泉記」の外、和文に俳句と漢詩を交えた紀行が数多くあり、現在その出身地清武町安井文庫内に収められている。（但し1・7は漢詩がない）

1. 昼寝の友 寛政八年四月 都於郡紀行
2. 米良の見塩 享和二年三月 米良紀行
3. 尚白集 文化三年秋 江戸京阪紀行
4. 豊の秋 文化十三年閏八月 佐土原紀行

5. 卯の花 文化十五年四月 延岡紀行、息軒同伴
6. 二日酔 文化十三年？六月 佐土原紀行
7. 梅の香 文化十四年四月 高浜香積寺（月知梅）紀行
8. ひとり旅 文政二年四月 高岡紀行

右のうち、「尚白集」が最も長文のものであるが、既に前記の如く「安井氏紀行集」に収めたので、ここには「卯の花」より若干を引用しておく。

ことし文化十あまり五つと云ふ年。卯月中の一日。延陵までの佳境・騷人を尋んと二男南陽を携出るに。雨のそほ降ければ。晴ての後の遊びぞいと興あるべけれど。人々とどむる袖をふりはなして。

適の旅衣なり古あわせ

滄洲

卯の花をふり顧る首途かな

南陽

加納村を過けるに。賤の家の垣根道の側所々の卯の花の咲るを見て。

卯の花や此道の記の誓始め

滄洲

経加納村

南陽

東郊百里伴烟霞 吟畔相迎八九家 墻樹青青花尽落 一村渾唱采茶歌

渡赤江

滄洲

漫漫赤水望佳哉 無限扁舟去又来 北岸番松南岸柳 綠陰深处有章台

この年、滄洲五十二才、息軒二十才。南陽は、すなわち息軒の当時の号。加納村を経て大淀川南岸の赤江に到達したのである。

行々て財光寺村に到る。この所は久成師菟裘の地なれば。幽栖をたたきけるに。履を倒にして悦迎へ王ふ。庭のけしき静にして。若楓玉椿など植たる石台三つ四つすゑならべたり。竹の籬、家を繞り。苔の徑。隣に通ひ。木々の若葉の軒端につらなるまで。真に浮世の外とぞおもはれける。

茂る木の世を隔てたる広哉

麦秋にかまはぬ草の庵哉

次久成師隱居

滄洲
滄洲
滄洲

幽居古村外 留滯染余年

四壁紅塵遠

千株綠樹連

煮茶時偶語 撫枕或高眠

此処宜招隱

何求洞裏天

同

南陽

苔逕無俗客 夜景入窓清

月底収山色

風前足浪聲

放歌狂士意 許酒故人情

閑適渾如是

悠然不識明

財光寺は日向市富高の南。菟裘の地は隱居の地。勝を倒にすは、客の来たのを喜んで出迎える意、「魏志」

王象伝に見える故事である。

久成師は、この旅行に於ても往復二度訪問して歓待をうけているが、その経歴について詳かにすることがで

きないのは遺憾である。

以上によつても知られる如く、みな俳句と漢詩が程よく融和して、渾然一体となつており、和文俳句のみの紀行、または漢文漢詩のみの紀行には味あわれない独特の風格が感じられる。

同文庫には、右の外、漢詩集として、

1. 雞 助 集

2. 滄 洲 詩 稿 古今各体百五十八首

3. 詩 稿 五律百六十七首 五排九首

4. 詩 稿 七律二百七十三首

5. 五 七 絶 五絶百首 七絶四百四首

右の五冊が保管されている。前記の「温泉記」「尚白集」の中にある作が重複し、また部分的に、集の中の作について、語句の改訂を加えてあるものが見出される。

「雞肋集」は、文化九年一八一二四月十六才六月、限時百詠したもので、巻頭に自序がある。

雞肋集序

伝曰。詩者志之所之也。然今之作詩者。強命題索句。而不問志之所之也。要在鬪才爭名耳。豈可不謂違温柔軟厚之教乎。然而若小子初学夫詩者。焉能得遽入佳境乎。日積數句。月疊數篇。造次必於是。顛沛必於是。而後始可与言詩已矣。是故予結吟社。定会日以研究詩学。蓋有年。今茲文化九年六月望日。会于真福山。以試一日百詩。自辰迄申則成。然予也素学固才陋。三構思十更稿。猶未能動天地感鬼神。而況四時之間。以滿百篇之數乎。無一可采録者。乃欲弃之者數。而以二三子之不許。姑雞肋存焉。故因名曰雞肋集。

右の序につづいて百詩があげられているが、その一、二を示せば、

山行 値雨
山行六七里 陰雨打林鳴 伐木知何処 丁々薄暮声
山寺
柴扉鎖白雲 蕭条庭樹裏 日暮鳥声聞

の如きものである。
山畔千年寺 柴扉鎖白雲 蕭条庭樹裏 日暮鳥声聞

次に「滄洲詩稿」その他から各体数首を引用してみよう。

偶作
清城有儒士 自為席上珍 十五志于学 詩書日相親
三十遊京国 礼楽旁求人 今年四十余 孜孜希日親

以文時會友 以友爰輔仁 唯因知音少 夙志未能伸
是故深逃世 独安陋巷貧 荷耨耕隴畝 持竿釣海浜

高歌謝美酒 自甘委灰塵

清城は郷里清武。自己の経歴に托して平素の所懐を述べた。第六・七句は先に記るした如く、文化元年（二八〇四）三月、三十八歳の時、江戸勤務となり、滞京一年、公務の余暇に古屋普陽の教を受け、帰途、京阪の名勝旧蹟を探り、皆川淇園の門に学んだことをいう。ちなみに、西村天因著「学界の偉人」皆川淇園の項、受業門人帖の中に、文化二年六月朔日。日向飯肥人。安井平右衛門完字子全。二十九才。と見えるが、二十九才は三十九才の誤りである。

青 島

神宮卓鹵彩霞横 異草奇花映浪清 瀟嶋春光都不俗 盤桓自怪到蓬瀛
青島を詠じた作が数首散見する中の一首。承句は広く熱帯植物をさし、盤桓はあちらこちら歩き廻わること
をいう。

青 島 見 月

青島雲晴金鏡浮 滄波引影万尋流 团团自似班姬扇 何羨峨眉半月秋
班姬は前漢成帝の宮女班婕妤。その「怨歌行」の中に、「团团似明月」の句がある。
結句は李白の「峨眉山月歌」の起句「峨眉山月半輪秋」を想起せしめるものがある。

飯 肥 道 中 作

密雨凄凄六月寒 曳筇遙上碧雲端 蕭然鳥道無佳興 来往只吟行路難
當時清武より藩城飯肥への道は、鏡洲―山仮屋―郷之原を経由する険阻な山道であった。

癸酉十二月二十四日。辱教授官之命。謹賦。

奉命談経泮水宮 趨庭弟子總豪雄 腐儒元是無才学 何及文翁化蜀功

文化十年（一八一三）十二月、飯肥の藩校振徳堂が落成し、滄洲は総裁、息軒は助教を命ぜられ、清武を引揚げて飯肥に勇躍赴任したのである。

泮水宮は泮宮、諸侯の学校。趨庭は門下にて教を受けること。文翁は前漢の学者。景帝の末、蜀の郡守となり、教化を崇び、学校を興し、蜀地の文学、齊魯に比するに至つた。

王維の詩「送東川李使君」三体詩 五律に、「文翁譎教授。不敢倚先賢。」の句がある。

高城 覽古

首夏吟過古戰場 村翁對我說興亡 可憐昔日金湯地 四顧蕭条麥隴黃

同

八陣圖荒是一時 騷人弔古謾吟詩 當年勇士今安在 松下空留墮淚碑

同

飛將出師天正年 虎爭竜戰動山川 浮雲猶帶旌旗色 日夜翻々古壘辺

この三首は前記の「卯の花」の中にも収められている。括弧内は一作である。

高城（たかじょう）は宮崎県高鍋町の西北約十二軒。天正六年（一五七八）十一月、大友宗麟は、島津義久・

義弘とここで戦い、戦破れて豊後に引きあげた。その古戦場である。「墮淚碑」は晉の羊祜の故事とは別の意味で涙を落さしめる碑。

与清武諸君。会明教室。分題得間居吟。八庚。

間居非避世 衰齡此養生 窓前山与水 相对日愴情

莫言親友少 鳧鷖可結盟 莫言佳味乏 薇蕨可和羹

高吟風樹答 散步伴流鶯 從來真樂土 何必問蓬瀛

明教室は文政十年（一八二七）十月、滄洲六十一才の時、創立された郷里清武の郷校。南に雙石山を望み、

清武川に臨む形勝の地にあり、滄洲父子の住居は、道路を隔てて、すぐ南側にあつた。息軒の親友、塩谷宕陰

の「明教堂記」によつて知られている。

謾 成

茅堂卜築小溪濱 十畝山田隔世紛 天上光陰如逝水

人間富貴似浮雲 百年長守詩書業 三代俱修礼楽文

自笑寰中知己少 栖簷燕雀日同群

前作と同様な心境を述べたものである。

病 中 作 三首録一

女孫繼五才 牀下日遊娛 向我慇懃問 何為貌太懼

女孫は息軒の長女須磨子、五才であるから天保四年（一八三三）、滄洲六十七才。この年三月、息軒は藩主侍説

となつて江戸に上り、桜田邸に住んだ。

この詩の起句は、唐の施肩吾の幼女詞「幼女繼六才、未知巧与拙、向夜在堂前、学人捧新月」を思わしめるものがある。

老 病 十首録一

老病交遊少 無端遇旧知 欲話深愁尽 言長口舌疲

中年の頃から神経痛などに悩まされていたが、天保の初め頃、中風を患い、同六年の春からは次第に重くなり、閏七月二十一日、六十九才を以て死去したことは前記の如くである。六年になつてからの作であろうか。

「滄洲隨筆」は片仮名交りの平易な和文であるが、その人となりを推察されるものが多く見られる。

一、友人問テ曰。朱子ト徂徠トノ学風。何レカヨロシキヤ。予答テ曰。一句一章ノ解方ニハ。何レモ是モアリ。非モアルヘシ。然レトモ朱子ノ学ハ。性理ニ泥テ禅学ニ似タリ。徂翁ノ学ハ礼楽ヲ解。其外ノ事多ク。古ニカノウト云ヘキカ。然レトモ朱子学ノ弊ヲ除ンタメニ。言激切ニ過タル所アルヘケレトモ。其

功モ亦大ナリ。近年人々学流ヲ立ルモノモ。皆徠翁ノ先登ニ從フテナリ。且徠翁ヲ陽ニ非トスルモノモ。陰ニ其説ヲ奪フモノ多シ。是徠翁ノ学力大ニ人ニ過タル所アル也。

一、大学格物致知ノ章。朱子闕文アリトテ。コレヲ補フ事甚タ分ニ過タリト云ヘシ。ソレ聖人ニアラスンハ。誰カ聖人ノ心ヲ知ンヤ。聖人ノ心ヲ知スンハ。焉ソ聖人ノ書ヲ補フ事ヲ得ン。タトヒ朱子自ラ聖人トラモヘルモ。人以テ聖人トセス。聖人ノ書ヲ補フ事ヲ得ン。且彼章闕文ニアラサルモ知カタシ。何ニシテモ。朱子ノ加筆ハイラサルコトナリ。君子ハ其知サル所ニ於テ。蓋シ闕如ストアリ。

一、孟子ハ性善ト云イ。荀子ハ性惡ト云フ。何レモ一偏ノ見トイヘトモ。人ヲ教導センタメニイエリ。孟子ハ人ノ性ハ善ニシテ。仁義礼智ノ四端カ四体ノ如クソナハリテアルカラ。道ヲ行ハネハナラヌト云テ教ヘ。荀子ハ人ノ性ハ惡テ。惡ハ仕易キカラ。学文ヲシテ。惡ナラヌヤウニト。学文ヲススメ教ヘタルナリ。シカレハ性ノ善惡ノ所ハ違ヘトモ。人ヲ教ユル所ハ一ナレハ。人々道ヲ学ヒ得タル上ニテハ。性ノ善惡ハ次ノコトニテ。宋儒ノ論ノ如キハ無益ノコトナリ。

以上の數項によつても知られる如く、古屋昔陽・皆川淇園など所謂古注学派の教をうけて、ややもすれば、程朱学に反対する傾向が強く見られるのである。

一、椎本流ノ誹諧ニ。清水ハイツモアレハ。清水結フト云ネハ。季ニナラス。汗ハイツモ出ルモノナレハ。汗拭フトイハネハ。季ニナラス。蛤ハイツモアルモノナレハ。蛤ニシルトイハネハ。季ニナラスト云説アリ。大ナル僻説ナリ。ソレ清水ハイツモアレトモ。賞翫スルハ夏ナリ。汗ハイツモ出レトモ。甚シキハ夏ナリ。蛤ハイツニテモアレトモ。盛ナルハ春ナリ。何レモ其重キ所ヲ季トスルナリ。若椎本ノ説ノコトクナラハ。梅ヤ桜モ木ハイツニテモアレハ。花トカ咲トカイハスシテハ。季ニナラジ。虫ヤ鹿モ居ルコトハ。イツモヲレハ。鳴クナリトイハスハ。季ニナラジ。万物ミナシカリ。何ソ清水・蛤ノミナランヤ。ソレ三日・五日・九日ハ毎月アレトモ。三日・五日・九日トイエハ。三月・五月・九月ナルカ

如シ。ソノ重キ所ヲ以テナリ。

当時、飢肥藩内に俳諧が流行しており、清武からも雨桂館美津丸・太田治水・均下亭巴国など全国的にも名の知られた俳人がでてゐる。巴国は滄洲と親交のあつた椎の本派の俳人であり、その猶子雨律の請を入れて、追悼集「あきの名残」を編集して序文を寄せてゐる。

滄洲の作品は前記の「温泉記」「尚白集」にも見られ、本稿の「卯の花」にも引用したが、みな漢詩の作品と相まつて渾然融和し、独特の風格を醸成してゐる。

この項は、その俳諧についての見解を示したものである。

一、僧ハ樹下石上ノ境界ニテ。山中ニスムモノナレハ。古修験者ニ限ラス。諸僧皆山伏ト云ヘリ。然レハ寺モ山中ニ在シユヘ。山号アリ。今ハ城市ニ軒ヲナラヘテ。山号ヲツケタルモヲカシ。衣服モ天竺ニテハ。人ノ捨テタルヲ拾イ洗イソ、キ。足ザルハ。男女ノ衣裳ヲツキ合セテ服シヌ。今ノ袈裟ノツキマゼタルモ。ソノ遺風トハ見ユレトモ。錦綉ヲ以テシ。麻衣・藤環ノ数ハ。一ツモ無。遊女・芸子ノ飾ヨリモ美ナリ。其上不徳ナルモ。金銀ヲ以テ官位ニス、ミ。人ノ高席ニ坐スルヲ手柄ト思ヘリ。ソレ釈迦ハ天竺ノ王子ナリ。モシ人ノ上ニ坐スルヲ手柄トセハ。何ソ王位ヲステテ。乞食ノ境界ニ居ランヤ。ソノ外食物モ。人ノ残飯ヲ己カ食量ニ応シタルホト。其日其日モロウテ食スル事ナリ。故ニ鉢盂ヲ心置器ト云ナリシカ。ソレホドニハアラストモ。肉食セヌホドニハアレヨカシ。

一、天主教ノ制禁ハ。甚タ宜シキ事ナリ。然レトモ。夫ヨリ家々ノ宗門定リ。檀那寺極リタルユヘ。無法ノ僧徒。檀家ノ米錢ヲ貪リ掠メ。奢ヲ尽シ法ヲ破リ。人ヲマトハン世ヲ妨ル事。天主教ニモ劣ラサルヘシ。滄洲の仏教嫌いは先に拙稿「温泉記について」の中にも述べたが、この思想はそのまま息軒にも伝わり、「送釈文亮」息軒遺稿 卷之二の中に、「余性不喜仏。……… 仏主治心。亦聖道之一端也。然以見性為成仏。則所謂治心者。亦与吾儒不同。況其余乎。後儒喜其遂乎理也。取以解吾道。遂有愈近理而愈乱真之說。是特其所見。非聖道之真也。………」

と述べているのは、滄洲の見解でもあつたであろう。

けだし滄洲はよき後嗣息軒によつて、学問・思想のすべてが完成されたというべきである。

薩藩宮内清之進が「寿安井滄洲翁序」稿々稿の中に、「嗚呼有子如此。翁豈得不愾然耶。」と述べているのを引いて、本稿の結びとする。

最後に本稿を草するにあたり、懇切な教示を与えられた各位に深く謝意を表する。

(1760・1・11)